

L O V E

農学者はなぜ、 失明したのか？

—マラリア薬禍とその波紋—

昨夏猛威をふるった病原性大腸菌O-157だけでなく、レジオネラやプリオン狂牛病など、聞き慣れない感染症の名が新聞をにぎわすようになった。また熱帯地方などとの交流が増えるにつれて、いわゆる輸入感染の問題もクローズアップされてきた。これら新興の感染症には、これまで以上に注意深い対策が必要とされている。

名古屋大学農学部の武岡洋治教授は5年前、アフリカのスーダンへ、農業と砂漠化の調査に出かけた。そこはマラリアの多発地域である。武岡さんは、予防薬としてマラリア治療薬「ファンシダール」を処方された。ところが3錠目の服用後、高熱とふるえ、全身の皮膚粘膜に激しい炎症があらわれる。緊急入院したスーダンの病院で、ファンシダールによる副作用スティーブンス・ジョンソン症候群と診断され、死線をさまようことになる。3週間後どうにか帰国したものの、ほとんど失明してしまった。医学医療が発達し、情報があふれている日本で、どうしてこのようなことが起こるのだろうか？この事件は各方面に大きな波紋を投げかけた。

砂漠化最前線へ

スーダン共和国は4大河文明の発祥地のひとつエジプトの南方にあり、エジプトより古い農業の歴史をもつ。豊かな水をたたえる青ナイル(写真1)、白ナイル川流域の耕地ではソルガム(写真3)、アワ、ゴマ、ラッカセイなどが広く栽培されている。現在、農業産品が総輸出額の90%を占める農業国である。しかしスーダン北部サブ・サハラは世界で最も砂漠化の進んだ地域だという。



写真1: 青ナイル川



武岡洋治 / たけおか・ようじ

1937年、三重県生まれ。名古屋大学大学院農学研究科修了。78年、米国ミシガン大学へ、85年、ボリビアの大学へ派遣。現在、名古屋大学農学部教授。専攻は資源植物環境学。

(写真: 梅村貴子)

この地ではもともとラクダの遊牧が行なわれており、ラクダ路による、農耕と牧畜の棲みわけがなされていた。しかし近年、オイルマネーをもまきこんだ農業の機械化政策により、土地の囲い込みが違法地にまで進み、その結果、森林の伐採、農地の過剰利用、過放牧、そして遊牧民と農耕民の対立が起こった。

ちなみに大規模農場の面積は、1960年には40万ヘクタール、80年に80万ヘクタール、85年には400万ヘクタールに達している。なるほど最初は生産量が増え、食料自給率も上がり、「アラブ産油国の穀倉」とまで言われた。が、いまでは「かえって、機械化農業プロジェクト区域は砂漠化危険度の最も高い地域と指摘するのが一般的だ」という。(武岡洋治「砂漠化・環境劣化の下における食糧生産と住民の健康」日本学術会議農学研究連絡会誌)

「合理化という資本の論理、机上の論理によるモノカルチャーはアメリカでは有効だったかも知れないが、この地では、何千年以来の生活基盤を壊してしまいました」と武岡さんは指摘する。

1984～86年に大かんばんが起り、食料自給率は22%に下落。なんと100万人が餓死してしまった。永年の内戦と機械化農業で



写真2: 植生の消えたサブ・サハラ



写真3:ソルガム



写真4:灌漑畑作地帯

土地が疲弊し、農業生態系までも破壊されたためです。青ナイルから1キロしか離れていない地域でも地下水位が低下し、井戸が放棄されています。見渡す限り広がる耕地には作物は何一つ見当たりません。そこは休閒農地ではなく、放棄されたということでした（写真2）」と武岡さん。

乾燥、高温、激しい砂嵐による表土の風食。大規模に作られた灌漑水路には、白い塩の結晶が見られる。土地を追われる遊牧民、農地を棄てた農民。彼らの行く先きは難民である。

武岡さんの協力者でもある、イサム・モハメッド名古屋大学農学部客員研究員は、「先祖代々ラクダの放牧をしてきたが、雨が降らないので、都会に出た」「73年にも大かんばつがあったが、この時の影響はそれほど大きくはなかった。しかし85年のかんばつの被害は甚大だった。この20年に農業形態が大きく変わったためです。現在、首都ハルツーム付近の難民キャンプには100万人以上の難民がいます」と語る。

1992年8月、武岡さんはこのような砂漠化と食糧危機を克服する農業方式を探るために、同僚の竹谷裕之教授とともにイサムさんの待つスーダンへ向かったのだった。

抗マラリア剤がおこしたアレルギーショック

1992年7月、武岡さんは愛知県旅券センター内にある医療法人財団交通医療協会名古屋診療所で、伝染風土病対策として、コレラ、A型肝炎、破傷風の予防接種を受け、マラリア治療薬「ファンシダール」を予防用にと処方された。その注意書きには、「流行地滞在中は毎週1回、帰国してから6週間は同様に内服すること。まれに薬疹等副作用がある（中略）。マラリアに感染した場合にも治療薬として有効」と書かれていた。

8月22日成田を出発。その日の朝、1錠目を服用。26日現地入り。ハルツーム市内の灌漑畑作地帯（写真4）から南下してコルドファン地方へと向かう。8月29日、2錠目を服用。調査の帰途、セナールに到着した9月3日、武岡さんの体に異常が起きた。眼が充血して

いる。喉が痛い。体がだるい。夏バテか？やがて上半身に発疹、眼と口に炎症、激しい悪寒と発熱が襲ってきた。9月4日、何か風土病にかかったことをおそれ、解熱剤のパファリンと3錠目のファンシダールを飲んだ。9月6日、ハルツームに引き返し、ドクター・サレーに診察してもらう。

ドクター・サレーはきっぱりと「これは極めて強いアレルギー、ステーブンス・ジョンソン症候群である」と告げた。その症状は「全身の滲出性紅斑出現角膜炎症による視力低下。口腔、鼻腔粘膜の剥離と出血による閉塞。亀頭、肛門粘膜の剥離。発熱および倦怠感著明」というものだった。「この病気にかかると95%は死ぬ。冒された粘膜が鼻や喉をふさぐための窒息死だ」という。

血液検査の結果、マラリアにはかかっていなかった。抗生物質中心の治療がはじまった。同行者の竹谷さんとイサムさんは、薬を求めて街じゅうをかけまわった。激しい下痢。体温は41.5度にまであがった。高温乾燥の極まる病室。襲ってくる蚊との戦い。痛みと不安で眠れぬ日々。主治医のドクター・タマムと青年海外協力隊看護婦の藤井かおりさんは、全身とくに股間と両足指の皮膚消毒を欠かさず続けてくれた（写真5）。

帰国。そして失明の恐怖

9月25日、武岡さんはイサムさんにつきそわれて帰国した。体重は13キロも減っていた。かけつけた奥さんは、車椅子に座った変わり果てた姿を見て絶句した。「顔面に赤くただれた斑点多数。眼にはいっぱい目のやにと充血。唇にかさぶた、亀裂、出血。口内は浮腫。足指の爪すべてなく、裏は全面浮腫」であった。

そのまま名古屋大学医学部付属病院分院に入院。皮膚症状は徐々に回復していった。しかし、問題は眼であった。副作用は眼に集中していた。転院、退院、再入院、退院、そして通院を続けること1年あまり。角膜の潰瘍侵食と眼の乾燥は刻々と進む。「涙が出ないために眼球表層への酸素の供給が不足する。酸素の不足を補おうとして結膜に毛細血管の新生が活発になり、これが角膜の領



写真5: 入院中の武岡さん（右）とタمام医師（中央）および夜中にも目薬を差しに来てくれた看護婦さん（左）

域にまではり出し瞳孔をも被ってしまう結果となる、これは体内の自己免疫の機能が作用している」。「顕微鏡をのぞくことを仕事としてきた」武岡さんには、「眼が潤れる」と思われた。角膜が破れ潰瘍が内部に進行してきた。失明の恐怖との闘いは、スーダンでの闘病に勝るとも劣らぬ辛い日々であった。「研究生命を絶つには視力を無くすればよい」。これがその頃、武岡さんの脳裏に最も強く焼きついていた言葉であった（94年6月6日付け朝日新聞『論壇』「マラリア薬禍と薬務行政の不備」）。

やがて93年11月、わずかに見えていた左眼までも失明しかかる時、京都府立医大で角膜移植を受ける。手術の経過は良好であった。「角膜を提供してくれた方の愛をこの身にうけたという実体験、そしてそこからにじみでる喜びまたは精神的充実感、それが今私に与えられている、このことの意味するところは極めて大きい」と、武岡さんは著書に記している。

さらに同12月、竹谷さんたちの奔走により、『公務災害認定』の申請がみとめられた。新聞は「マラリア薬禍は公務災害／失明状態名大教授、文部省が認定／学術調査でスーダンへ出張した際、予防用に処方されて飲んだ抗マラリア剤の副作用で瀕死の状態に陥り、失明状態になった名古屋大学教授に対し、文部省は26日までに公務災害の認定をした。予防用に飲むと副作用の危険が増し、厚生省も治療用にしか認めていない薬だったが医師から予防用に処方された、との証明書類を添えて申請していた。今回の認定は、教授側に過失はなく、薬を処方した医療機関や、使用上の注意を医療機関に徹底しなかった薬務行政の責任を重くみた結果、とみられる」と報じた。

光を求めて

武岡さんの症例は、日本寄生虫学会や日本皮膚アレルギー学会などで発表され、ショックを与え、大きな関心呼んだ。

「裁判にすべきだ」「法廷闘争をするのが、教授としての社会的責任だ」ともいわれた武岡さんは悩み、考えた。

武岡さんの出した結論は、「特定の機関、あるいは個人の過失責任を追及するのではなく、自分の辛い体験を冷静に客観的に、直接的に世に問うことによって、『教育的効果』を期待したい」とい



写真6: スーダンの盲学校で

うものだった。つまり、こうである。

- 1、抗マラリア剤「ファンシダール」を、厚生省は予防薬としては認可していない。治療薬としてのみ認めている。しかし日本のある医療機関では予防薬として推奨し被害者が出た。この事態を薬務当局者はどう受け止めるのか。
- 2、WHO（世界保健機関）は1980年代後半、強度の副作用があるファンシダールを治療薬としても追放している。それが1992年の日本で、なぜ処方されていたのか。厚生省はWHOの決定をキャッチしていたのか。
- 3、このような薬禍を二度と起こさないために、具体的にどのような対策をたてるのか。

武岡さんを診察したスーダンのドクター・サレーのみならず、アメリカ大使館付きの医師も、「いったい何故、日本ではファンシダールをいまだに使っているのか」と詰問したという。このあたりに、血液製剤、クロロキン、サリドマイドなど、多くの薬禍と同根のものがあると思われる。

社会薬学研究会では「スティーブンス・ジョンソン症候群は、重篤な副作用で発生頻度はまれではあるが、薬剤にとってはよくある副作用である。現在の添付文書でざっと調査したところ、アスピリンや抗生剤をはじめ、1089の薬剤にスティーブンス・ジョンソン症候群が発生する怖れがあることがわかった」（ふくおか県薬会報Vol.8 No.10 1995）と発表された。

「薬には副作用がつきものだといわれます。しかしそれを止むを得ない、といってしまったら、副作用の被害者が救われません。副作用のない薬の開発を最重要課題にしてもらいたい」と武岡さんは言い切る。武岡さんの頭の中には、京都の病院で知り合った小学生Yちゃんのことがある。Yちゃんは4歳のとき、抗生物質の注射を受け、その副作用のために極度に視力が落ちてしまった。病院との間でいまでも係争中である。

セナール・スーダンの会

武岡さんが自らの体験記『遥なる旅路の果てに——マラリア薬禍



写真7：セナール・スーダンの会を語る。左からイサム・モハメッド、武岡、青山の各氏

生還の軌跡——』を自費出版すると、全国からたくさんの手紙や電話が来た。

反響の多くは、何らかのかたちで眼を患った経験から、武岡さんの闘病の不安に共感をよせるものや激励だった。やがてそれらは、「セナール・スーダンの会」に結実する。武岡さんの友人で会の世話役である青山章行さんは、「武岡先生の病気はあきらかに人災。社会的問題です。裁判に訴えるべきだという人もいました。しかし先生はむしろ裁判で取り残されるもの、放置される人のいることを考えたい、あくまで教育の現場で訴えたいといわれるのです。そこで私たちのお手伝いも、先生の本を一人でも多くの人に読んでもらい、本代などをストックして、先生の命を救ってくれたスーダンの人たちへのお返しに協力したい、ということになりました」と経緯を語る。(写真7)

武岡さんはスーダンの病院で、「患者の生命にとって大切なもの」を教えられたという。「スーダンの病院は、日本政府の援助によってつくられたものでした。建物だけは立派だが、脱脂綿にすら不自由している状態でした。そんな中で、ドクター・サレーだけでなく主治医のドクター・タマムもあらゆる病気を診療する必要にせまられてきたためか、非常に学識が広く深いのです。しかも外国人の患者である私に人間対人間として、ひたむきな熱意と奉仕の心で接してくれました。それはもちろん、彼だけではありません。病院の看護婦さんも常に明るく温かく、どんなに救われたかわかりません」。細分化し管理とスケジュールに追われている日本の病院で見失っているものが、スーダンにはあるのかも知れない。

1995年、武岡さんは二人の子息とともにスーダンを再訪する(写真6)。「命を救ってくれた全ての人たちにお礼をいうため」である。スーダンの盲学校へ点字タイプライターも携えた。スーダンで多数の子供たちが視力を失う原因は、栄養失調、トラコーマ、そして寄生虫だという。武岡さんは「日本の病院眼科に入院中、私は、糖尿病や高血圧から視神経障害、眼底出血などに苦しむ患者を多数見てきました。ありあまるほどの食物と薬が、かえって人間の眼を損なってきているのだと思います。経済的、医療的貧困がアフリカの人々の視力を奪っているとするなら、日本では物質的過剰と錯誤が人々の眼の健康を損なっている。その誘因が対照的で

はあっても、本質において両者は環境がもたらした失明、いわば環境失明と言えるでしょう」と語る。

スーダンの盲学校でひとりの少女が「私の眼は何も見えないけれど、私の心は何でも見えます」といった。この言葉ほど武岡さんにとって大きな励ましを与えたものはない。

今春、イサム・モハメッドさんは名古屋大学で学位を取得してスーダンに帰る。彼との強いつながりのもと、「セナール・スーダンの会」は盲学校やリハビリセンターでの教育、そして持続的農業や貧困・飢餓の克服への取り組みの方法を探りはじめている。

＊

「セナール・スーダンの会」の連絡先は：

〒468名古屋市天白区海老山町1709 青山方

TEL:052-809-1166 FAX:052-809-1167

＊＊

武岡洋治著『光通かに——薬禍を超えて——』（新教出版社）をVITALITE読者10名にプレゼントします。ご希望のかたは官製葉書または添付葉書に住所、氏名、年齢、電話番号、職業などを明記のうえ、

〒106東京都港区東麻布2-3-4 (株)東機質 ヴィタリテ事業部
までお申し込みください。